

# 北海道医歌人会詠草



## 惜春賦

釧路 兎玉 昌彦

北の果て大地を這って咲き誇るチシマザクラの生の執念  
開拓の人の心を慰めし桜の大樹はいまも原野に  
儂さはソメイヨシノの淡き色このひとときの乙女子の肌  
年増にも似た咲きぶりの八重桜 はち切れそうな 崩れて来そうな  
狂おしき桜ふぶきに酔いしれていまひとたびの春の一夜を

## 地方医療

北広島 古屋雅三知

立ち行かぬ地方病院喰ひものに利益むさぼる医療法人  
急速に拡大せしは裏ありて 出来ぬ約束口先三寸  
「常勤も三人出すぞー」の約束は 五年たてども未だゼロ名  
民営に移管せざるを得ぬ事情 国の無策に苦肉の選択  
町長の苦渋の選択俣ばるる 町民守る術他になし

## 滴る夏

函館 水関 清

追分の 唄いの声に導かれ 山河に満ちる光を思ふ  
漆黒のうねりの中に沈む茶の 濃き緑飲む 瀬戸黒茶碗  
夏水ひと口ごとに匙舐めて つぶやく「うまし」 ふるさと詠り  
言い出せばそこから零れ落ちそうな 想いの重さ 小径歩めり  
満天を彩り消ゆる大花火 祭り帰りは はしやぎて淋し

## 庭

旭川 稲積 文子

窓外にこぼれるような梅の花 今年梅酒を作ってみよう  
新緑ピンク色のつつじ針葉樹 我が校庭は一大絵巻  
ひそやかに頭を垂れてつつましく 薄紫のすみれは咲きぬ  
何処から移りて来しか花すみれ 小きき庭に居場所を見つけて  
冬囲い外されて樹々はのびのびと 春の陽差しを謳歌しており

## 十六歳のころ

江別 三宅 浩次

改革という名のもとに転学を余儀なくされた日は晴だった  
入り口で呼びかけられた小学校の元同級生 今超美人  
若さとは「やんちゃ」を許す特権と知らずに過ぎた我も友も  
酸っぱさも甘さもともに青春は心の隅に脈々と  
自分では七十年の時間でも宇宙的にはほんの一瞬

## シデコブシ

札幌 浜島 泉

コーヒーを煎ずる香り 朝の町シデコブシ花開き始めぬ  
栗色に緋色このごろ黄むらさき タレンガの壁の移ろひ  
山野草の写真送りし旧友は 登れぬ私の代行といふ  
ゴミ出しの主婦に挨拶ステーション 初対面なるも隣人の笑み  
シナノキの香り漂ふ 緑地帯丘の端に見し木に咲きつべし